

■ 2000年度テーマ研修会

「国際協力セミナー」報告

セミナー担当者：平山 恵
(筑波大学)
報告者：津村 俊充
(人文学部心理人間学科教授)
楠本 和彦
(人文学部心理人間学科助教授)

6月3日(土)4日(日)の二日間にわたって、南山大学人間関係研究センター主催で、2000年度テーマ研修会『国際協力セミナー』が行われた。講師は、筑波大学の平山恵先生をお招きした。平山先生は国際連合、WHO、国際開発高等教育機構、NGOなどで、45カ国以上にわたり国際協力の仕事をされ、現在は筑波大学社会医学系の専任講師をされている。このセミナーの参加者は、約20名であった。

セミナー参加の前に、『近代化の理論』(富永健一著、1999、講談社学術文庫)を読み、「発展途上国への援助とは発展途上国の近代化を助けることなのか?」について、1000字程度の宿題が出された。本書は、近代化とは、産業化とは、社会構造とは何か、社会変動とはなどを内容とする、500頁にわたる大作である。

第1日目(6/3、土曜日)

初日は、集まってきた約20名が、2グループに分かれ、グループを作り、2日間のプログラムを過ごすことになった。そのプログラムの最初に、持ってきた宿題を提示しながら、「自分が呼んでもらいたい名前」、「セミナー参加への期待」、「援助が近代化を助けるか?」のキーワードを用いて自己紹介をしてみた。その後、平山先生自身の自己紹介と、国際協力、今回のセミナーで、意図して使っている「援助」についての小講義が行われた。

(1) 援助形態の3つの種類

- ODA：政府開発援助：公的援助、二国間援助の功罪(一つの価値観)
- 国際機関による援助：WHO、ユニセフ、ユネスコなど：多国間援助

の功罪（多様な価値観）

- NGO：二国間でできない援助ができる（日本の例として、ボランティア貯金のサポートの功罪→単年度主義）

(2) 援助の歴史

- 60-70年代：西欧は、社会インフラー衛生ー水道、井戸、学校、病院建設
- 80年代：B H N (Basic Human Needs)病院までの {アクセス}、{コントロール（誰が決定することができるかなどの問題に関わる）たとえば、水くみは女性、その水をどのように利用するか決めるのは男性}
- 90年代：H D I (Human Development Index)：人間の開発をしないといけない：生きていてよかったと思えるところまで：教育を受ける機会、延命を選択するしない、ジェンダーの問題など。

(3) 援助のはじまり

- 日本は、賠償問題から始まる
- 欧米では、いわゆる、票集め。東西対立からスタート→自由主義社会 V S 社会主義社会→南北問題になる
- NGOは、布教から始まる

(4) 援助、協力の後の姿を見ると、これでよいのか？の疑問がわく。

- カンボジア：国連アンタックの介入：内戦→西欧化
- ニカラグア：人を殺してモノを盗るようになる：お金を持ちたい：貨幣経済の導入

(5) イエメンにおける援助活動を例にして問題提議

- モノがとれない、とるモノがないから、援助が入らない国だったが→O E C D (Organization for Eco-cooperation Development)による
 - 小国に対する援助促進、○ 内戦が終わった国への援助促進より、ルワンダ、カンボジア、イエメンなどへの援助が行われるようになる。：多くの場合、東西の西が負けて東が援助：自由化しましょうということから。
- イエメンでは、出産は、膝つき産であった。ところが、2000年までに4000人の助産婦を作ろうという計画の元で、日本（初期は結核だけに援助）、ドイツ、オランダ、アメリカのODA、そして国際機関と、さらにはNGOも協力して援助することになる。目的は、イエメンの1400/10万ほど（ちなみに、日本で6、7人/10万、スウェーデンで2、3人/10万、アメリカで4人/10万）のMMR（出産時の、新生児や母親の死亡率）を下げるために。仮説としては、介助している人が非衛生的で、伝統的産婆が問題であるということから。
- イエメンの女性にとっては、膝つき産が楽な姿勢での出産形態であるにも関わらず、西洋の医学、近代医学が科学的であるということから、

ベッドの上に仰向けに寝て出産する産婆方式を導入することになる(オランダの人類学者が参加して、イエメンの女性たちにインタビューしているにも関わらず)。近代化、科学的な方法であるという思いこみがそうさせてしまっている。そして、デリバリーベッド(折り畳みの動くベッド)がどんどん運び込まれる。これは、とても大きな介入である。そして、さらには、包帯&注射器&はさみなどが入った治療セットが配られることになるが、注射器の針など今後ずっと交換が不可欠(エイズなどの問題を考えた場合)なものの導入が、適切な導入といえるのだろうか、こうしたことが大きな問題である。

昼食中に {伝統} の反対語をさがせという宿題が出された。昼食中も、何人かの参加者は、しりとり遊びを楽しむように、「伝統の反対といえば?」「新作」「新作といえば」「レンタル」「レンタルといえば」「借り物」「借り物といえば」「そのとき限り」「そのとき限りといえば」「短い」などと、{伝統} の反対語探しも楽しいひとときとなった。

昼食後のプログラムは、反対語を紹介しあってスタート。続いて、F A S I D (財 国際開発高等教育機構) が提供してくれた教材「裏庭養豚プロジェクトの改善」のプリントとV T Rを見て、各グループごとにP C M (プロジェクト・サイクル・マネジメント) 手法の簡易スタイルで、国際協力プロジェクトの見直しと討議を行った。

【1】参加者分析(関係者分析)

ケースのプリントとV T Rを参考にしながら、関係している人や組織をすべて列挙する。そして、その特徴は何か、利害・関心は何かを丁寧に記述しながら、グループでリストアップする。その作業を通して、社会を知っていくのである。その話し合いの過程でメンバーから疑問点などが出てきた際には、「info」マークを付与しておき、現地調査でその事実をしっかりとインタビューする。最近の社会を知る視点として、R O Nという言葉が使われる。

R(esoource) : 資源、人・モノ・金=Tangible Resourceだが、Intangible Resourceもある。

O(rganization) : 組織

N(orms) : Social Norm : 社会規範、価値観

【2】問題分析

このステップでは、原因結果をツリー上にぶら下げながら、それらの因果関

係を明確にしていくという作業である。初日は、この問題分析の道半ばで、午後5時を過ぎ、解散となった。

第2日目（6/4、日曜日）

昨日の援助は近代化を助けるかのキーワードの2つ目を考えるように、平山先生から指示を受け、第2日目は、それぞれそのキーワードを説明することで、昨日のふりかえりを行った。参加者の一人である人間関係研究センター研究員の津村は、キーワードとして、「均衡の攪乱」を取り上げた。それは、富永氏の著作「近代化の理論」の中での社会変動が起こっていくプロセスが、まさに個人やグループの成長のプロセスでクルトレビンが提唱する「unfreezig-moving-freezing」のプロセスと類似した展開理論枠であり、そのunfreezingを引き起こさせることを「均衡の攪乱」とよび、それをいかに内発的なエネルギーとして起こさせることができるか、まさに、それが介入のありよう、ファシリテーターのありように関わるキーワードなので取り上げた。さらに津村は、2回目のキーワードとしては、養豚のケースを巡る討論をしながら、これが適切でないとか、これが良い悪いという判断を、介入前にはすべてはできないので、実践しながら改善していく、改良していくプロセスが大切という意味で、「試行錯誤：プロセス：絶えまぬ努力」というキーワードを書き記した。（「人間関係トレーニングによる人間の変容」津村俊充、1993、『人間の社会的育成と変容』原岡一馬編、ナカニシヤ出版）

【3】目的分析

問題分析の系図をもとに、そのカード一枚一枚を「望ましい状態」に書き直して、「手段－目的」の関係を明確にする作業を行った。この作業を通して、前段での問題分析が適切に行われていたかの吟味にもなるし、次につながるプロジェクトの選択作業への大きな橋渡しになるのである。

【4】プロジェクトの選択

このステップでは、もう今回のセミナーの時間はそんなに残っていなかった。それでも、いくつか考えられる、プロジェクトを考え、それらを実際に実施するとしたら、どのような結果を引き起こすか、様々な選択基準をリストアップし、プロジェクト実施に関わる問題点等を引き出していった。

すべての参加者は、熱心に参加され、熱い討論が行われた。

そして、最後に、「よそ者の役割とは」何かを、一人ひとりカードに書き出した後、一緒に作業したメンバーと分かち合い、そして、全体グループで、シェアして、国際協力セミナーの研修は終了した。この「よそ者の役割とは」を

考える作業は、まさにファシリテーターのありようを探る、とても大きな一助になった。

国際協力セミナーから学ぶファシリテーターの介入の心得 (津村)

- (1) 今の国の状況、グループの状況のデータをしっかり得ること：観察する、調査する
- (2) 内側の力では、動き出せないときの大きな力になること：石を投げる、波風を立てる
- (3) グループで、話し合っているときに、ちょっと介入してほしいときがある
 - ・これでよいのかどうか、不安になっているとき
 - ・話し合いが停滞しているとき
 - ・サブグループに分かれて話し合っているときに、ジョイントしにくくなっているとき
- (4) ファシリテーターの介入のタイミング：早いとファシリテーターへの依存が強まるし、あまり遅くなるとそのグループも一つの見方だけでことが進んでしまっていて修正ができなくなる。
- (5) データの記述・表現の仕方は、できる限り具体的に表現すること
- (6) コンテント（参加者分析、関係者分析、問題分析、目的分析など話し合っている内容に関わること）とプロセス（その話し合いがグループの中で、どのように話し合われているかに関わること）の2点の視点は絶えずもっていること。

文献

富永健一（1999）：『近代化の理論』、講談社学術文庫

津村俊充（1993）：「人間関係トレーニングによる人間の変容」、原岡一馬編、『人間の社会的育成と変容』ナカニシヤ出版

注：この報告は津村俊充の「国際協力セミナー参加から学ぶファシリテーターの介入の心得」（津村のWEBサイト：“つんつんの体験から学ぼう！”“<http://www.ic.nanzan-u.ac.jp/~tsumura/zakkann/kokusaikyouryoku.html>”）を、津村俊充と楠本和彦が加筆修正した。よって、文責は津村、楠本にある。